

“洞窟”をめぐる戦い

それは 北方への旅立ち

へのプロローグ……

“〈星の盾〉の時代”が過ぎ、後に“王の平和”と呼ばれる時代が到来した。うわべだけは平和なこの数年間、盾ドワーフの王国たる“洞窟”において、大いなる戦いがあった。

リートブルク城におけるソラルド王の戴冠式が、すべての始まりだった。ソラルドは、前王にして父であったブランドゥルに比べ、アンドールの人々から軽んじられていた。この平和をもたらした真の功労者が、ソラルドではなく〈アンドールの勇者たち〉であることを、みなよく知っていたからである。だがその勇者たちも、今やその役目を終えていた。

戦士ソーンは城に残り、馬の飼育係を務めていた。射手チャダは魔女レカに従い、国を巡りながら治癒の術を学んでいた。

魔術師エアラは故郷ハドリアを懐かしんでいた。アンドールにおける彼女の責務は、既に全うされている。来る日も来る日も北岸を訪れ、製鋼家メリックとともに、北方へと向かう船を待ち続けた。

さっさとおいで、お嬢ちゃん！

チャダの冒険心の上には、まるで収穫を終えた畑の残雪のように、平和の倦怠が降り積もっていた。

ドワーフのクラムとはいえば、ひとつの重大な想いに心を奪われ、ほかに何も考えられなくなっていた。そこで山の剣狼オルフェンに同行を頼み、王への拝謁を願い出た。

陛下、いにしえの四つの盾は、ほんらい我ら盾ドワーフのものでございます。国家安寧となつたいま現在、それらの盾を、このままこの地上に残しておく理由はありますまい？

我が友クラムよ、それは余の理解とは異なっておる。〈絆の盾〉を再び見出したのは、この余ではなかったか？ かつて灰色山脈で〈星の盾〉を用いてタロクと対峙したのは、誰であろう余の父君ではなかったか？ よつていま現在、いにしえの盾が余の手中にあるというこの揺るぎなき事実は、まさしく運命の必然。余はこれまで、あまたの脅威に対してこれらの盾を用いてきた。それはこのアンドールの平和のみを想うてのことではない。盾ドワーフのためでもあったと心得よ。



余の、だと？ ギルダの酒場で、いつも蜂蜜酒に溺れていたあのうたらが、いったい何の世迷い言だ？

魔法の品だか何だか知らないが、たかが盾2枚のことで、本気で盾ドワーフらとこをこまえるおつもりで？

陛下、我ら盾ドワーフは、アンドール王国の臣民ではございません。もちろん我らが首領ハッルガルド侯爵もまた、陛下の従臣ではございません。侯爵にも忍耐の限界があるろうということ、ぜひとも御考慮にお入れください。

口を慎め、山の剣狼ごときが！

この余が、盾ドワーフらに忍従を強いていると申すのか？ クラムよ、余はかつて汝に一目置いていた。だが今、汝そが誰と相まみえておるのか、わきまえるべきではないのか？

怒り心頭のクラムは、謁見の間をあとにした。

ハッルガルド侯に伝えよ。『盾はリートブルクにあるべし』と。誓って言い渡す。いつか盾ドワーフらが困窮し、真にその力が必要になった折、余みずからが盾を持参して救援に向かおう——実際に余が今までそうしてきたようにな。さあ、行け！

いやはや、なんととても素晴らしいおかたを玉座に据えてしまったものだな。まあ、もともと城の空気なんかは、おれの肌には合わないんだがね。あんたと一緒に南に下ることにするよ。そろそろギルダの酒場が恋しくなってきたところだ。



三日後、山の剣狼とこのドワーフは、無事『酔いどれトロール亭』へと到着した。だが、はやる心を抑えきれないクラムはそこで別れを告げ、“洞窟”へ先を急いだ。

事態が風雲急を告げたのは、その直後であつた！



『市橋』を越えたとたん、クラムはもうもうと立ち昇る煙を目の当たりにした。

まさか“洞窟”が！

数日後、遙かアンドール北岸の
エアラとメリックは、水平線上に
一隻の帆船を見出した。

ほら！ 船だよ、エアラ！ やっと来たんだ！

ほぼ同時に、エアラは
鷹の姿に気づいた。巻
物を携えた鷹は、彼女
の元へと降下した……

その手紙を広げ、思わ
ず息を呑んだ。

怪物の包開。
〈鉦山〉燃か！
救援を！ クラム

エアラ！
どこへ行くんだ？

ソーンの前へ。
〈鉦山〉へ急ぐ
には彼の馬が
要る。

ほどなくエアラは、リートブルク
城に到着した。厩舎でソーンを
見つけると、クラムからの伝言
を伝えた。

とにかく急
がないと！

わかった。二頭に鞍を乗せ
て、城門まで引いて行って
くれ。おれは王にかけあつ
て〈盾〉を借り受けて来る。

ううむ
む……

ソラルド！
〈鉦山〉が燃えている！
〈盾〉が要るんだ！

なんと？

いったい何ごとか？

クラムが窮地に陥ってる。“洞窟”が
攻撃されてるんだ！ 今から助けに向
かうから、すぐにあの〈盾〉を出してく
れ。急いで！

ほほう。これは
面妖な偶然よ
のう……

何だって？



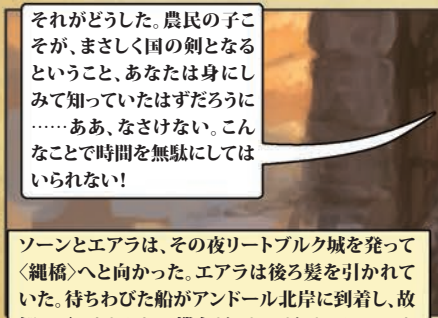
実はな、我らがクラムは、つい数日前、〈盾〉を求めて余の元にやって来たのだ。その舌の根も乾かぬうちに『〈洞窟〉が危機で〈盾〉が必要だ』などとぬかすとは……偶然を装ったぐらいで、この余を欺けると思うてか？



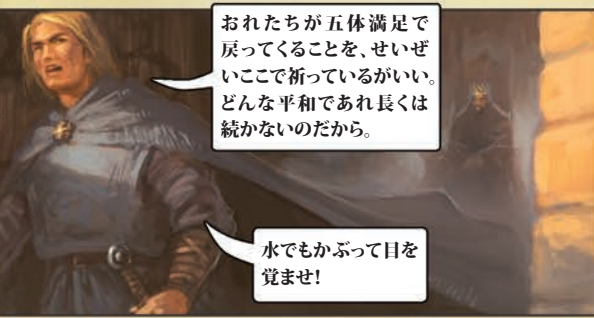
なにを言ってる？
気でも違ったか？



黙れ、ソーン！ 汝の主君に対して、なんたる口の利きようだ？ 汝はしょせん、剣しか能のない農民の子ではないか！



それがどうした。農民の子こそが、まさしく国の剣となるということ、あなたは身に見て知っていたはずだろうに……ああ、なさない。こんなことで時間を無駄にしてはいられない！



おれたちが五体満足で戻ってくることを、せいぜいここで祈っているがいい。どんな平和であれ長くは続かないのだから。

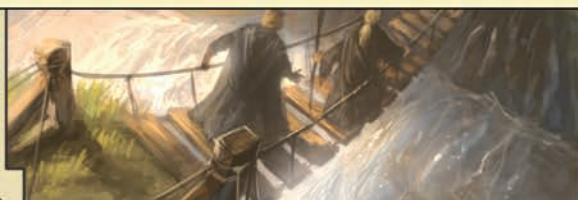
ソーンとエアラは、その夜リートブルク城を発って〈繩橋〉へと向かった。エアラは後ろ髪を引かれていた。待ちわびた船がアンドール北岸に到着した。故郷に戻るまたとない機会だったのだ。きっとメリックは今頃、ひとりて船出していることだろう。

水でもかぶって目を覚ませ！

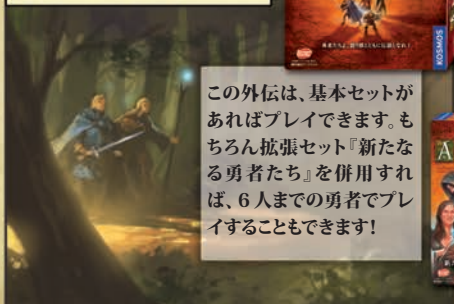
翌朝〈繩橋〉に着くと、そこを渡れない馬を城へと返し、先を急いだ。



〈見張りの森〉を抜けるのに数時間を要した。だがエアラとソーンは、そこでさらなる勇者に出会えることを期待していた。



さらに半日後、彼らはずいに〈廃鉱北口〉へとたどり着いた。剣戟が響き渡り、なかには火災によるひどい臭気が立ちこめていた。不安が、ふたりの前に横たわった。



この外伝は、基本セットがあればプレイできます。もちろん拡張セット『新たな勇者たち』を併用すれば、6人までの勇者でプレイすることもできます！



さあ、いよいよ外伝3『“洞窟”をめぐる戦い』の始まりです！